מִשְׁכָּן

シリーズ「神の御住まい(ミシュカーン)」 No.1

人となって、私たちの間に住まわれたイェシュア

ベレーシート

●神の究極的なご計画は、神の幕屋(御住まい)が人とともにあることです(黙示録 21:3)。これは天と地の基が置かれる前から神ご自身のうちにあったヴィジョンです。そのヴィジョンに向かって歴史は進んでいます。旧約時代、モーセに告げられた幕屋の建造もその一つです。これからシリーズとして「モーセの幕屋」について学んでいきますが、そこには「神と人とが共に住むこと」がどういうことかが啓示されています。

●出エジプト記には、32～34 章を除き、実に 13 章(25～31 章と 35～40 章)をも費やして幕屋建造の指示と、そこで奉仕する祭司について記述されています。25～31 章は幕屋に関する神の指示が記され、35～40 章は実際に指示どおり造られたという報告の記述です。幕屋が完成したとき、「雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。」(40 章 34 節)とあります。

(1) 幕屋の名称

①聖所(出 25:8)　②主の幕屋(レビ 17:4)　③あかしの幕屋(出 38:21)　④会見の幕屋(出 27:21)
⑤会見の天幕である幕屋(出 39:32)　⑥あかしの天幕(民 9:15)　⑦主の聖所(民 19:20)
⑧神の宮(士 18:31)　⑨主の家(Ⅰサム 1:7,9/主の宮とも訳す)・・といろいろな呼び方がなされています。

(2) 幕屋建造の目的

「彼らがわたしのために聖所を造るなら、**わたしは彼らの中に住む**。」(出エジプト 25 章 8 節)

●つまり幕屋は、主なる神がイスラエルの民の中に住む(内住)所であり、会見の場であり、神の臨在を示す場所でした。しかしそれは天にある本物の**住まいの地上における模型(影)**です(ヘブル 9 章 23～24 節)。また「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた(=幕屋を張られた)。」(ヨハネ 1 章 14 節)とあるように、幕屋と幕屋内の多くの器具は**イエス・キリストの型**なのです。そのことをこれから少しずつ学んで行きたいと考えています。

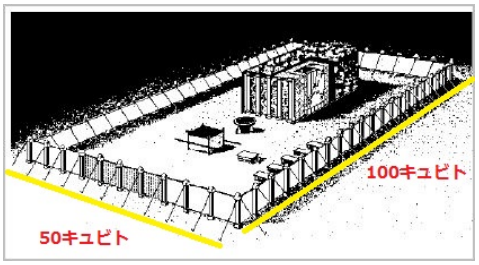
(3) 幕屋の構造

●幕屋の構造の概略は是非とも頭で描けるようになりましょう。
幕屋の構造としては、東側に【門】があり、そこを入ると【大庭】(中庭とも、庭とも言われます)があります。そしてそこに祭壇と洗盤、聖所とその中に至聖所があります。今回は、幕屋全体を囲っている枠に注目します。その枠内を「庭」とも、「中庭」とも、「大庭」とも言いますが、原語はすべて同じ「ハーツェール」(חָצֵר)です。その「庭」の周囲を囲っている亜麻布でできた「掛け布」とそれを支えている「柱」、および、

「ひも」と「釘」(杭)にも注目して、それらの象徴的意味について考えてみたいと思います。

1. 長さ 100 キュビトと幅 50 キュビトからなる幕屋の枠

●幕屋の構造の枠となる長さと幅は、右図にあるように、それぞれ 100 キュビトと 50 キュビトで、その比率は 2:1 です。長さの単位である「キュビト」と訳された原語は「アンマー」(אַמָּה)です。1 アンマは腕の肘から手の中指までの長さですが、その長さの解釈には幅があります。短いアンマは 45.6cm、長いアンマは 53.2cm です。その中間の長さ(平均値)を取ると 49.4cm。つまり約 50cm と考えることができます。したがって幕屋の長さは約 50m、幅 25m とみなすことができます。そして高さは 5 キュビトの 2.5m です。その周囲は亜麻布で囲まれていました。だれでも容易に囲い越しに中を見ることはできない高さです。この高さと布によって幕屋の内側は、門を通って入らない限り、外から覗くことはできなかったのです。門を通ってこの「庭」の中に入ることにより、神と人との交わりが可能とされます。ですから、人がこの枠の内側にいるのか、外側にいるのかが、神とのかかわりにおいてきわめて重要なことなのです。



●「五千人の給食」の奇蹟にある「五つのパンと二匹の魚」は有名です。貧しいながらも、それを主に差し出すことで奇跡的な神のみわざがなされるという意味で解釈されることが多い箇所です。こうしたメッセージは、教会の会堂建設や何かのプロジェクトを進める場合の励ましのメッセージとしては都合の良い解釈です。各自の賜物を活かし合うことで予想をはるかに超えた神のわざを見ることがしばしばあるからです。確かにそうしたメッセージは聖書の中にあることも事実ですから、間違ってはいないと思います。しかし、この奇蹟を、「御国の福音」という視点から見るならば、また別の解釈が可能なのです。

【新改訳改訂第 3 版】マルコの福音書 6 章 38～44 節

38 するとイエスは彼らに言われた。「パンはどれぐらいありますか。行って見て来なさい。」彼らは確かめて言った。「五つです。それと魚が二匹です。」

39 イエスは、みなを、それぞれ組にして青草の上にすわらせるよう、弟子たちにお命じになった。

40 そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。

41 するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられた。また、二匹の魚もみなに分けられた。

42 人々はみな、食べて満腹した。

43 そして、パン切れを十二のかごにいっぱい取り集め、魚の残りも取り集めた。

44 パンを食べたのは、男が五千人であった。

●おそらく、上記の聖書の箇所であまり関心を抱かない部分があるとすれば、それは 40 節の「そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。」という部分ではないかと思います。なぜ「百人、五十人」なの

でしょうか。たとえ「パンを食べたのは、男が五千人であった」ということを了解したとしても、「百」と「五十」の数、そしてその「2 対 1」という比率をもって、「それぞれ組にして青草の上にすわらせ」たというその意味は、幕屋について学んだことのない人はその意味が全く分からないはずです。

●この「五千人の給食」の奇蹟が啓示している事柄は、イェシュアと幕屋が一つであることを啓示しているのです。つまり「神が人とともに住む」という御国の福音を、イェシュアが奇蹟という形でデモンストレーションしようとした出来事なのです。福音書には「五千人の給食」だけでなく、「四千人の給食」の奇蹟も記されています。なぜ、似たような奇蹟をわざわざ記しているのでしょうか。その必要性はどこにあるのでしょうか。それは、「五千人の給食」はメシア的王国についてであり、「四千人の給食」は「永遠の御国における福音」、つまり最終的な「神の幕屋が人とともにある」(黙示録 21:3)という「新しいエルサレム」の啓示であるからです。「新しいエルサレム」は幕屋の最も聖なる部分である「至聖所」を啓示しているのです。(※)

※詳しくは、「牧師の書斎」の「ヘブル・ミドゥラーシュ例会(第三回)」の中の「『五千人の給食』と『四千人の給食』に見る『御国の福音』のヴィジョン」を参照のこと。

●このように、モーセの幕屋を学ぶことの必要性は、それが神の御子イェシュアがこの世に来られて語った教え、あるいは、行なった奇蹟と深く結びついていることを理解するためです。別の言い方をするならば、「モーセの幕屋」を学ぶことは、聖書を「ヘブル的視点から新しく読み直す」ことになるのです。今日、一般的傾向として、ペンテコステ系の教会では幕屋について語られることが比較的多いように思います。しかし、福音派と言われる教会では、幕屋について(説教や聖書研究で)語られることが少ないように思います。そのために、聖書全体における旧約と新約を結ぶ神の緻密なご計画について知ることの脆弱性があるのは否めません。つまり、聖書を横に読んでいないということです。そのため聖書を鳥瞰的に理解することにおいて弱いのです。教会学校の教案誌を見るならば、それは一目瞭然です。神のご計画は神の歴史の中に啓示されているにもかかわらず、大人も子どもも聖書を横に教えられていないために、聖書全体が一つに繋がってこないのです。それに対する解決の鍵は、「ヘブル的視点」から、あるいは「御国の福音」の視点から聖書を読み直すことにあると信じます。次世代における教会を考えるならば、これは緊急を要する、きわめて重要な課題と言えるのです。

2.　庭の周囲を囲っている亜麻布による掛け幕

【新改訳改訂第３版】出エジプト記 27 章 9, 11～15 節

9 幕屋の庭を造る。南側に面して、庭の掛け幕を、その側のための長さ百キュビトの撚り糸で織った亜麻布を、張る。
11 同じように、北に面して、その長さで、長さ百キュビトの掛け幕とする。柱は二十本、その二十個の台座は青銅で、柱の鉤と帯輪は銀とする。
12 また、西に面して庭の幅には五十キュビトの掛け幕、その柱十本、その台座十個とする。
13 前面の東に面する庭の幅も五十キュビト。
14 片側に寄せて、十五キュビトの掛け幕と、その三本の柱、その三個の台座とする。

15 他の片側にも十五キュビトの掛け幕と、その三本の柱、その三個の台座とする。

●白い部分が「亜麻布」です。「亜麻布」を作るためには、「亜麻」の茎の繊維を撚り糸にして、それを織って作ります。当時のイスラエルの民の衣服は羊毛か亜麻布で作られていました。しかし、祭司でないイスラエル人の衣服にそれら二つの素材(羊毛と亜麻糸)を織り混ぜて織ることは律法によって禁じられていました(申 22:11)。それは釣り合わぬ「牛とろば」を、一つのくびきにつなぐことが禁じられているのと同じ理由からです。

●幕屋ではその亜麻布が長さ 280 キュビト、高さ(幅) は 5 キュビト。1 キュビトを 50cm として計算したとしても、280 キュビトの長さは 140m です。しかも幅 5 キュビトは 2.5m です。亜麻の繊維を撚って糸を作るまですべてが手作業で、それをさらに織り上げて布にするのですから大変な手間がかかったはずです。

●庭の掛け幕は「撚り糸で織った亜麻布」で色は「白」です。「白」と言っても、それは色で染めていないだけのことですから、「真っ白」という意味ではありません。この掛け幕の内側は「神の御住まい」としての場所であり、外側はイスラエルの民(人)が住む宿営の場所です。この二つは亜麻布の掛け幕によって明確に区別されています。神とともに住むためには、この掛け幕の内側に入らなければなりません。**亜麻布の「白」は、汚れなき聖なる方、および、義なる方であるキリストの人性を表しています。**人となられたイエシュアは人間が到達することのできない完全な歩みをなされました。そのことを表わしているのが亜麻布の「掛け幕」なのです。

3. 白い「亜麻布」の全長が 280 キュビトであることの象徴的意味

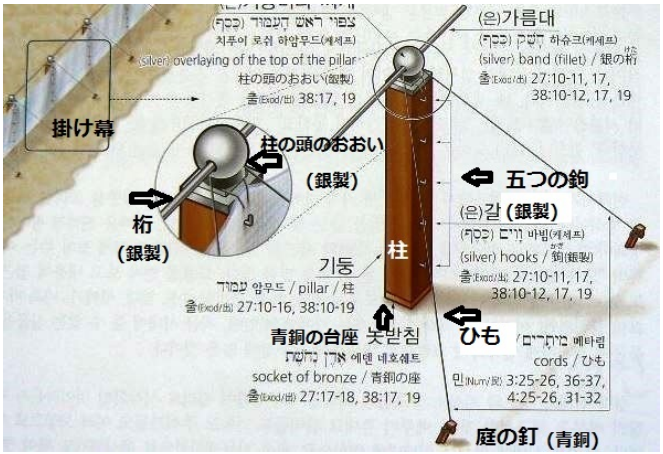
●東側の門の部分を除く「亜麻布の庭の掛け幕の全長」が、なぜ「280」キュビトなのでしょうか。それには理由があります。その理由は、280 が人間の妊娠期間である 40 週の数だからです。7 日×40 週=280 日、これを掛け幕の全長 280 キュビトが示しているのです。人間の場合、女性の月経周期を 28 日として計算すれば、妊娠してからちょうど 10 ヶ月目に入る時が出産予定日ということになります。

(↑上図は柱が外側にあります。それは理解を助けるためのもので、本当は、柱は掛け幕の内側にあって外側から見えません。)

●「280」キュビトの内訳は、南の 100 キュビトと北の 100 キュビトの 200 キュビト。そして西の 50 キュビトと東の 30 キュビトです。東の 30 キュビトは以下の図にある配分となっているからです。

4. 幕屋の掛け幕を支える 60 本の「柱」

●幕屋の庭は、撚り糸で織った亜麻布の掛け幕が柱に掛けられて周囲を囲われています。南と北側にそれぞれ 20 本、西と東側にそれぞれ 10 本の柱が立っていますが、外からこの柱を見ることはできません。しかもこの柱は何の材料でできているのか言及されていませんが、幕屋全体を考えるならばそれはアカシヤ材であると考えられます。しかしあえて柱について何も語られていないということが重要なのかもしれません。それはあたかも世には知られずに立っている、後に啓示される「教会」を象徴しているのかもしれません。なぜなら、「教会は、真理の柱また土台」(I テモ 3:15)とあるからです。



●その柱には、付属する銀製の「柱の頭のかぶせ物」と「帯輪」、そして同じく銀製の柱に「5 つの鉤(ホック)」、青銅の「台座」があります(右図を参照)。

(1) 柱の「おおい」(銀)と「台座」(青銅)

●幕屋の庭の柱の頭には「銀」が、また柱の台座には「青銅」が使われています。聖書で「青銅」という場合は、それは「銅」のことを指しています。最も耐火性のある金属です。幕屋の庭にある金属は「青銅」「銀」です。聖所では「銀」と「金」、至聖所では「純金」が使われ、奥に行けば行くほど価値の高い金属が使われています。「銀」は罪人のために払われた贖い(身代り)の代価としてのイエシュアのいのちを、また「青銅」は火のような試練である十字架を忍ばれたイエシュアを象徴しています。

(2) 「柱」を固定している「ひも」と「釘」

●庭の掛け幕を支えている柱は、それぞれ 2 本のひもと 2 本の青銅の釘によって地面にしっかりと固定され

ます。「釘」はそれに結び付けられる「ひも」がなければ何の役にも立ちません。「ひもと釘」によって庭の柱は真っすぐに立ち、荒野のどんな突風にも引き倒されないように押さえていたのです。これは庭の柱のみならず、幕屋本体のおおいも、同様に、ひもと釘で固定されていました。

●「ひも」(「メータール」**מֵיתָר**)と訳された同じことばが、天幕の「綱」として使われています。以下の三つの預言は、前者(A)がイスラエルとエルサレムの過去と現在におけるさばきとしての荒廃を預言しているのに対し、後者(B)と(C)は未来における(主の再臨後の)その町とそこに住む者たちが受けることになる繁栄と栄光を鮮やかに描き出しています。ちなみに、「釘」と訳された「ヤーテード」(**יָתֵד**)は、イザヤ書では「くい」と訳されています。

A. 【新改訳改訂第３版】エレミヤ書 10 章 20 節
私の天幕は荒らされ、すべての綱(「メータール」**מֵיתָר**)は断ち切られ、私の子らも私から去って、もういない。
再び私の天幕を張る者はなく、私の幕屋を建てる者もいない。

B. 【新改訳改訂第３版】イザヤ書 54 章 2 節
あなたの天幕の場所を広げ、あなたの住まいの幕を惜しみなく張り伸ばし、綱を長くし、鉄のくい(「ヤーテード」**יָתֵד**)を強固にせよ。

C. 【新改訳改訂第３版】ゼカリヤ書 10 章 4 節
この群れ(=ユダの家)からかしら石が、この群れから鉄のくいが、この群れからいくさ弓が、この群れからすべての指揮者が、ともどもに出て来る。

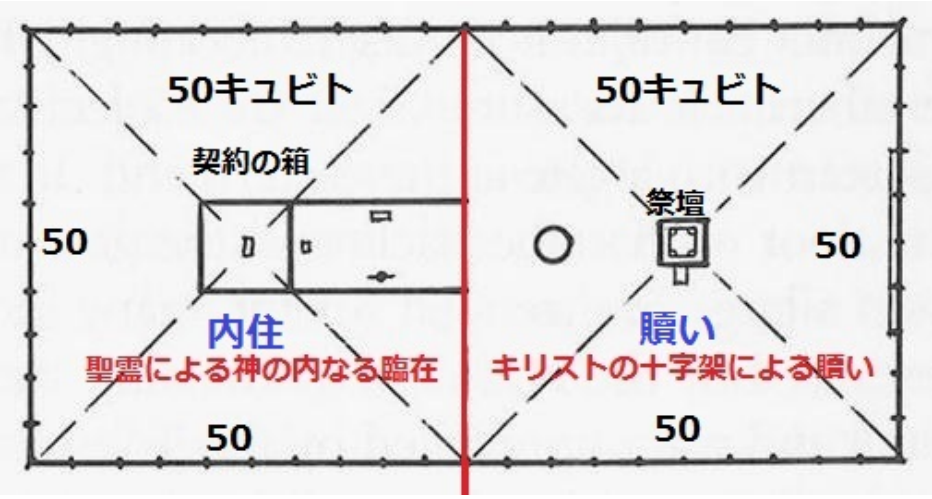
●庭の真理の柱と幕屋本体を支えている「ひも」と「釘」とは、イエシュアの「死」と「復活」、あるいは、神の「義」と「愛」、「恵み」と「まこと」を象徴しているとも言えます。この二つのうちどちらか一方が欠けても、真理を強固に支えることはできないからです。

5. 「5」と「5 の倍数」の象徴的な意味

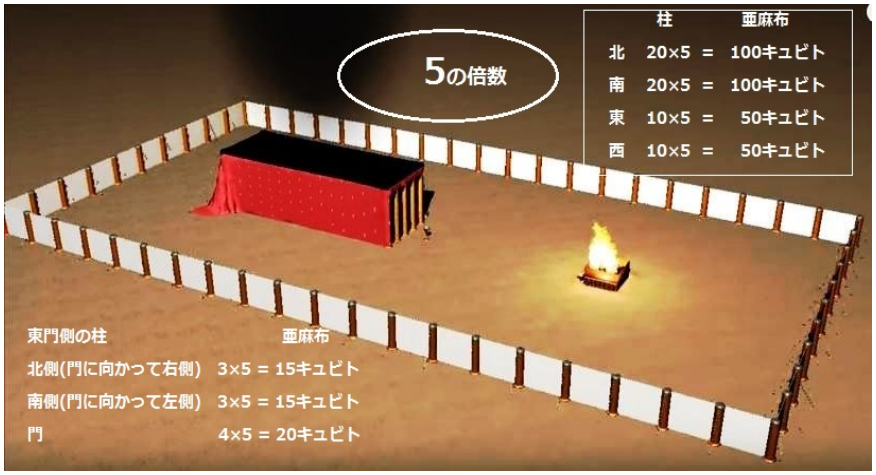
【新改訳改訂第３版】出エジプト記 27 章 18 節
この庭は、長さ百キュビト、幅は**五十キュビトに五十キュビ**ト、高さ**五キュビ**ト、幕は撚り糸で織った亜麻布、その台座は青銅とする。

●18 節に「幅は五十キュビトに五十キュビト」とあります。新共同訳はなぜか省略して「間口は五十アンマ」としていますが、原文は「五十に五十」となっています。つまり、ヘブル語では「ハミッシーム・バハミッシーム」(**חֲמִשִּׁים בַּחֲמִשִּׁים**)です。これは幕屋の構造が以下の図のように、一辺が「五十」の正方形二つからなっているからです。つまり、二つの部分からなっているからです。

●旧約においては、幕屋建造の計画がシナイ山でモーセに示されたのは、イスラエルの民が出エジプトしてから 50 日後のことでした。新約においては、イエシュアが十字架の死からよみがえって 50 日目に聖霊が注がれ、教会が誕生しています。また、幕屋が 50×50 の二つの正方形からなっていることは、神の贖いの二つの面を表しています。つまり、ひとつはキリストの十字架による贖いと、もう一つは聖霊による神の内住です。したがって、「五十に五十」というのは神の計画において重要な意味を啓示しているのです。



●幕屋の構造に見られる「五十に五十」は、幕屋が上記のように二つに区分されることを示唆しています。つまり、「**贖い**」と「**内住**」です。これはまさに出エジプト記のテーマそのものであり、神の救いのご計画を啓示しています。



●「5」と「その倍数」、および「2」という数の組み合わせは、幕屋全体の構造の中に、また、掛け幕を支えている高さ 5 キュビトからなる「柱」とその数、そしてその柱をしっかりと支えている 2 本の「ひも」と 2 個の「釘」(杭)。その組み合わせは、五千人の給食の奇蹟にあった「五つのパンと二匹の魚」で象徴されているといえないでしょうか。

●**また、「5」という数字は、以下のように、神に対する人間の責任を表わす数**でもあります。

(1) 神の御前で働く人間の責任を示唆している

●「5」は人間の責任を示唆している数です。同じく「5」の倍数もその意味を強調しています。つまり「5」と「10」は人体の構造の特質を示しています。たとえば、手の指は片方で 5 本、両方で 10 本です。

(2) 神の御前に歩む人間の責任を示唆している

●たとえば、足の指は片方で 5 本、両方で 10 本です。

(3) 神に対する責任の感受性の範囲を示唆している

●たとえば、五感がそうです。①視覚　②聴覚　③臭覚　④味覚　⑤触覚

●以上のように、人となられた神の御子イェシュアは、神の御前に人間としての責任をもって歩まれました。それは、まさに神がアブラハムに対して「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。」という要求を完全に果たされたことを意味します。

2016.1.31